

議会技術の必要性を再認識した オータムセミナー

議会技術研究会を設立してから約二年が経過する。この間、当研究会では六回のフォーラム・セミナーを開催した。そのうち今年は「自治体議員をめざす人のための自治講座（七月一四日）」に続き、「オータムセミナー（九月二九日）」を開催したが、この二つに共通するテーマは「市民と議会との交流」である。セミナーでは道内の六自治体議会（北広島市・栗山町・斜里町・別海町・浦幌町・芽室町）の議員・事務局職員が議会への住民参加の取組事例を報告した。報告は議会報告会、意見交換会、議会モニター制度、まちかどカフェ、高校生との対話などバラエティに富み、取り組む動機や参考事例、対象（地域、世代、職業、組織属性）、課題、今後に向けた修正と新規事業への展望がいきいきと述べられた。惜しくも登壇できなかった議会もあることから、北海道はまさしくこの分野における先進地であり宝庫といえるであろう。

セミナーのテーマ「市民と議会の交流」における議会技術論を整理してみたい。当研究会の設立方針は、「市民自治を基調に自治体議会の力量を高める観点から議会理論と議会実務を媒介する普遍性ある議会技術を豊かに構想・開発し、『実務をふまえた理論の形成』と『理論をふまえた実務の構築』をめざす」ことである。まず、「理論をふまえた実務の形成」についてであるが、私にとつては新規事業を導入する際のイメージに近い。セミナーに参加した議員が自らの議会において市民との交流事業を展開したいと感じた前提で述べるなら、神原勝氏（研究会顧問）の基調講演からわが国の地方自治における市民（住民）参加の経緯や取組内容を踏まえ、議会が住民参加に取り組む前段に「なぜ今、参加が必要なのか」という理論に共感し、ぜひこの理論を自らの議会に持ち帰り、議会内で理論を共有し実行化を図りたいと考える。このとき、「先進事例にはどのようなものがあるのか」「成功と失敗やアドバイスは何か」という事例調査（視察）が必要となる。これらは主に議会事務局や議会運営委員会、議会改革委員会、広報聴取委員会などが担う。実行化を想定しつつ「いつ、何を、どう進めるべきか、参加の対象をどうすべきか」を考えいくつもの代替案をつくり、抽出選択する過程において具体的な研究が伴う。さらには実行化にたどり着いても事中・事後検証と議員間討議が不可欠となる。このように理論を実務化に移していく過程において技術を要する。次に「実務をふまえた理論の構築」についてで

あるが、私にとつてはすでに実行化している事業を再確認するイメージがある。過去からさほど意識せずに実行している事業が他の議会や議会研究機関や報道機関などから思わぬ高い評価を受けることがある。例えば、私が芽室町議会事務局長を務めていたときに議会広報紙の毎月発行が高い評価を得た。その取組を理論的に説明する機会が増えたが、これは実行後に理論を構築していったに近い。住民参加策では地区別の議会報告会や意見交換会を見直す際に、全国事例を徹底的に集め調査研究し、団体別や世代別を加えワークショップやワールドカフェを導入し、参加策をアレンジし続けた。後にこれらの取組が成果として表れるときが訪れる。参加制度を用いながら執行機関側の原案を否決し町長再議を経て、議員提案により消防団設置条例を制定した体験である。これは実務をふまえた研究を重ねながら理論構築した実例である。

また、一つの議会活動に取り組む際で「実務をふまえた理論の形成」と「理論をふまえた実務の構築」を短期間のなかで往来させながら進めるケースも多い。つまりは現場の実務に落とし込めるように理論形成し実効性を高め、実務もまた理論に昇華できるような仕事を志し普遍性のある実務とすることなのだ。「この両者に共通するのが技術であり、理論における実務化の技術と実務における理論化の技術が現場をふまえて行われるとき、はじめて両者は融合可能となり改革が促進される」という神原顧問のことばが胸に響く。オータムセミナーは私にとつても議会技術を再認識する機会となった。

へにしな じゅん、議会技術研究会共同代表